OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	通訳の授業における「式辞挨拶集」の使用について : 「挨拶集」暗唱の有用性を考える
Author(s)	小倉, 慶郎
Citation	大阪外国語大学日本語日本文化教育センター授業研究. 2006, 4, p. 17-36
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/11056
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

通訳の授業における「式辞挨拶集」の使用について
—「挨拶集」暗唱の有用性を考える—

小倉　慶郎

【要旨】

日本の通訳養成学校（特に会議通訳コース）では、授業のはじめに、日英対訳の「式辞挨拶集」を生徒に暗唱させることがある。「式辞挨拶」は通訳の現場では頻出するが、これは、駆け出しの通訳者にとってはなかなかの難物である。だが逆にこれらの定型パターンをあらかじめ暗誦しておけば、通訳現場でのパフォーマンス改善に大いに役立つことになる。「式辞挨拶集」の暗唱は、通訳志望の日本人大学生に効果的であると思われるが、外国人留学生にはそれ以上に効果があると筆者は考えている。留学生には馴染みがない、日本企業や一般社会で使われる「日本語の、改まった書き言葉」に触れることができるからだ。「改まった書き言葉」は、留学生の日本語学習上の盲点でもある。本論では、筆者の通訳の授業で使用している「式辞挨拶集」を取り上げ、特に外国人留学生に対する有用性について考察していく。また、「挨拶集」の日英対訳を比較し、プロ通訳者の巧みな訳出法についても言及する。

はじめに

日本には、プロ通訳者養成のための語学学校が数校ある。筆者も、10数年前に、そうした通訳学校のひとつに受講生として通っていた。30－40年以上前、日本で通訳という仕事がビジネスとして始まった「草創期」なら、通訳学校へ通わなくてもプロとして仕事を始められたかもしれない。しかし、現在のように通訳がビジネスとして発達し、通訳者のレベルが格段にアップした時代に、日本で通訳養成学校へ通わずにプロになることはほとんど不可能である。私が通学していた当時も、帰国子女、留学経験のないものを問わず、通訳業界は専門の養成学校で訓練を受けた人間のみを「プロ」として認める時代に突入していた。それから私は数年かけて「会議通訳コース」を卒業し、プロとなってからは、今度は通訳養成学校の講師として通訳者の養成に携わってきた。

私が通った通訳学校の「会議通訳コース」では、入門レベルでは時事英単語集を暗唱させ、本科へ進級してからは英日対訳の「式辞挨拶集」を暗唱させるのが決まりだった。授業のはじめ15－20分程度の時間を割いて行われたこの作業の意味は、当時の私にはよくわからなかった。「一日も早く進級して、プロとして仕事をしたい」という思いしかなかったから、ただ講師に与えられるまま、毎学期、毎学期「式辞挨拶集」を黙々と暗唱したのだった。

一見不可解だったこの「式辞挨拶集」の暗唱は、プロとなって通訳の現場に出ると、大いに役に立った。通訳といっても、ビジネス通訳、レセプション通訳、会議通訳[1)]などさまざまな種類があるが、その中で共通して顔を出す紋切り型の言葉の通訳が、初心者には意外と厄介なのである。この「紋切り型の文句」こそが式辞挨拶である。逆に言えば、繰り返し出てくる文句だからこそ、この日⇔英をしっかり暗唱してさえいれば、現場で立ち往生する危険は格段に低くなる。筆者が駆け出しのころ、自分の通訳を聞きながら「まるで魔法のような効果があるなあ」と思ったことを思い出す。

1. 式辞挨拶はなぜ難しいのか

まず「式辞挨拶」とは何なのかを考えてみたい。オーストラリアのモナシュ大学が発行している*Handbook of Formal Speech for Interpreters*（以下*Handbook of Formal Speech*）の序文では次のように定義されている。

> 式典や集会におけるスピーチなどは、内容が比較的簡単なために通訳しやすいように思いがちですが、実際にはそのような場でしか使わない特殊な表現などがあって、意外にむずかしいものです。英語にもスピーチ特有の表現はありますが、日本語は英語以上に改まった場で述べる表現が発達していて、このような種類のスピーチは「式辞挨拶」と特別な言葉で呼ばれています。(p.2)

具体例については巻末の資料2を参考にしていただきたい。式典や改まった場で使う、あの「もってまわった言い回し」である。式辞挨拶の通訳は「特殊な表現があって意外に難しい」のだが、その難しさを実感してもらい、その難しさの理由を考察するために、ここで篠田顕子氏のエピソードを紹介することにしよう。篠田氏は、現在、東京国際大学の教授として後進の指導をされているが、いまも放送通訳・会議通訳で活躍されている通訳業界のビッグ・ネームの一人である。以下は、ICU（国際キリスト教大学）に在学していた、大学生当時の回想である。

> 忘れもしない。私が生まれてはじめて通訳をした、ハワイでのあの日。
> 「ただいまご紹介にあずかりました副田文子（そえだふみこ）でございます。今日はみなさまご多忙のところこのようにお集まりいただきまして、恐縮でございます。先ほどのご紹介にもありましたように、私は今回、広島・長崎世界平和巡礼団の一員として、この美しいハワイの地にやってまいりました」
> スピーカーが本当にこのように言ったかどうか、記憶は定かではないが、小さな昼食会でのご挨拶というあの場を考えると、スピーチはおそらくこのような内容で始まったに違いない。通訳の形式は、スピーカーがひと区切りしゃべると止まり、その間に通訳が訳すという「逐次（ちくじ）通訳」方式。副田さんはここまでしゃべると「どうぞ、お願いします」というように、横に立っている私に顔を向けた。
> しかしじつはこのとき、私はパニック状態にあった。ソーシャル・ワーカー20人ほどの小さな集まりとはいえ、人前で通訳するのははじめて、人前でしゃべるのもはじめてという、どちらかというと恥ずかしがり屋の大学3年生。
> 帰国子女で一応英語は不自由ないと思っていたものの、「ご多忙のところ」とか「恐縮でございます」などというフォーマルな挨拶言葉は、どう訳せば英語らしい英語になるのか皆目わからない。私の英語は高校生止まりで、社会人英語は知らないのだ。
> 「ただいまご紹介にあずかりました副田文子……」にしても、
> "My name is Fumiko Soeda, whom the Chairman has just introduced."
> と直訳しては非常におかしいのは感覚的にわかる。しかしそれではどうすればいいのかとなると、持ち札はゼロなのだ。今でこそ、
> "Thank you for the introduction, Mr. Chairman. And, good afternoon, ladies and

Gentleman. My name is Fumiko Soeda. . . "

あるいは、

"Thank you for your kind introduction."

だけで、名前は繰り返す必要はないなど、わかりすぎるほどわかっているが、当時は何もかもはじめてで途方に暮れる思いだった。[2)]

こうして通訳する言葉に窮してしまった大学生の篠田氏は、「もう少し続けてください」とスピーカーの副田さんにつぶやく。時間稼ぎである。さらに副田さんの話が進んでいく。当然のことながら、パニックは深まるばかりだ。そして2回目のパス。さすがに3回目のパスはできないと観念した篠田氏は、清水の舞台から飛び降りるつもりで、それまで話された言葉を英語に通訳する。

私の訳はあっという間に終ってしまった。おそらくスピーカーの言ったことの3分の1も訳しきれなかったのではないか。[3)]

これはトップ通訳者の40年以上も前の思い出である。当時の日本には通訳養成学校も大学の「通訳」の授業もなかった。だが、今日でも、通訳訓練を受けたことのない初心者が訳せば、同じような辛酸を味わう可能性がきわめて高いと思う。ではなぜ、彼女かパニックに陥り上手に通訳できなかったのかを考えてみたい。通訳の技術について、式辞挨拶の通訳の困難さについて理解が深まるはずだからである。

篠田氏は、帰国子女であったから、英語・日本語とも高いレベルの聴き取りと発話能力があったはずである。本文でも「帰国子女で一応英語は不自由ないと思っていた」といっている。日本人は自分の能力については謙遜するものだから、通訳を引き受けたという事実から考えて、「自分の英語力にはかなり自信があった」と考えていいだろう。英日両言語間の通訳の前提条件は、両言語の高い聴き取り能力と発話能力であることは間違いない（巻末資料1を参照）。したがって、当時の篠田氏はこの条件はクリアーしていた。だが、大学生の篠田氏は全く通訳訓練を受けていなかった。それが、通訳らしい通訳ができなかった一番の理由である。世間には語学能力だけで通訳ができると思っている人が意外に多いが、通訳訓練は、プロとしての仕事をするためには、それほど重要な意味をもつのである。通訳訓練全般の考察はここでは割愛するが、それでももしもこの時の篠田氏が、日本の企業に就職し、社会人経験があったのなら、違う結果になっただろう。はじめての通訳であっても、もっと適切な通訳パフォーマンスができたのではないかと筆者は推測するのだ。

社会人経験の無い大学生（19～24歳程度の年齢の学生）は、社会人経験を経た通訳者にはない、いくつかの問題点を抱えている。実際、日本のある通訳養成学校でベテラン通訳者がこんなことをいうのを聞いたことがある。後輩（この場合は、大学を卒業後、就職せずに通訳学校だけで勉強している23･4歳の若者）に対してこう忠告したのである。「プロ通訳者になりたいのなら、まず日本企業に勤めた方がいいよ」。このことばには深い意味がある。私の経験からいっても、日本でプロ通訳者（特にビジネス分野の通訳者）になろうとするのなら、語学能力と通訳訓練以外に、日本の企業経験から得るものが極めて大きいからだ。[4)]

具体的に、篠田氏の文章の中から大学生時代の彼女が抱えていた問題点を見てみたい。

「ご多忙のところ」とか「恐縮でございます」などというフォーマルな挨拶言葉は、どう訳せば英語らしい英語になるのか皆目わからない。私の英語は高校生止まりで、社会人英語は知らないのだ。

このようなformal speechで使われる日本語は、日常生活の場で聞かれることは少ない。まして大学のキャンパスではもっと少ないだろう。「ご多忙のところ」とか「恐縮でございます」などという言葉を学生同士が交わすことはまずないのである。したがって大学生であった篠田氏が、耳慣れない日本語に面食らったのは当然である。このことは現在の日本の大学生にもあてはまる。式辞挨拶で使うような改まった日本語を注意して聞いたこともないし、自分でも使えないという日本人大学生がほとんどであろう。さらにいえば、これは英語圏の大学生でもあまり変わらないようだ。

過去に、イギリス人、アメリカ人、オーストラリア人の英語母語話者（3人とも男性）が、私の通訳の授業の下見に来たことがある（それぞれ年度は別）。彼らは、結局その後履修を取りやめてしまった。履修をやめた原因はいろいろ考えられるが、いま考えてみると、そのときの授業で彼らに恥をかかせてしまったことが一つの理由かもしれない。このときの授業で「N委員会を代表しまして...」とはじまる、挨拶を通訳させた。そして3人とも“As a representative of the N committee...”と訳したのを覚えている。だが、formal speechでは、「～を代表して」はon behalf ofを使うのが慣例である。つまり”On behalf of the N Committee...”と訳さなければ通訳としては失格である。その旨を彼らにやんわりと伝えたところ、しゅんと静かになった。ショックを受けたようだった。

このことから、大学生程度であれば、英語母語話者でもformal speechに慣れていないのだなあ、と実感した。（なぜ、この時、「しゅんと静かになった」のか。いまにして思えば、筆者の無神経さがいけなかったのかもしれない。もしも、私たち日本人が、海外へ行き「忙しいところ」と言ったとしよう。それを、日本語を話す現地人に「この場合、『ご多忙のところ』というのが普通です」と注意されたらどうだろう。やはり軽いショックを受けるのではないだろうか。私の授業を受講しようとした3人の英語母語話者は、似たような屈辱を感じたのかもしれない。私の経験では、「面子」に関しては男性の方がやや敏感なように思う。この反省にたって、最近の通訳の授業では、英語母語話者の「顔を立てる」よう気を遣っている。）

このように日本人であれ外国人留学生であれ、社会人経験のない大学生は、こうしたフォーマルな言葉を聞きなれていないし、自らも使い慣れていないと推測できる。当たり前といえば当たり前の話だ。ところが、お金を取って仕事をする通訳の現場では「式辞挨拶」は頻出するから「当たり前」ではすまされない。

実際、本センターの通訳の授業で、「ぶっつけ」で式辞挨拶を生徒に通訳させようとしたことがあるが、ほとんど全員、言葉が詰まって何もいえない。これは、日系アメリカ人、日系カナダ人などの日英の高度なバイリンガルでも同じであった。このことは、日英語の語学能力とは別の部分が、通訳の障害となっていることを示唆している。

ピンカートンヨウコ・篠田顕子著『実践英語スピーチ通訳』は、「式辞挨拶」の通訳の難しさ

の理由を、次のように述べている。

式辞挨拶の通訳では、なじみのない古い言葉が使われたり、音だけ聞こえて漢字が見られないので意味が理解できない（例えば、賛辞、衷心より、慶祝の意を表す、有為な青年）などがよくあることだからである。(p.19)

さらに、聞き慣れない言葉を一方的に読み上げられるものだから、通訳の負荷はいっそう増すことになる。

用意周到に準備された書き言葉による原稿を話し手が読み上げるものを通訳することは、その場で即興でするスピーチを通訳するより、はるかに難しい。(同上)

一般に、書き言葉を速いスピードで読み上げられた場合、手元に原稿が無ければ、通訳者はお手上げになる場合が多い。書き言葉はメッセージが凝縮されているから、それを早口で読み上げられたら、意味を把握できずに通訳が困難になるのである。一方、即興的なスピーチは、話者が考えながら、つまりポーズを置きながら進行していくことが多い。その場合、メッセージが読み取りやすく、通訳しやすいのである（もちろん、話の内容が極端に専門的なもの、あるいは論旨不明快な場合は、即興であっても通訳困難な場合もある)。それでも、即興スピーチと、書き言葉＋読み上げのどちらが難しいかと聞かれたら、通訳者の10人中9人までが後者の方が難しいと答えるだろう。

以上の考察から、式辞挨拶を通訳する難しさの原因をまとめてみたい。

① 大学生にとって聞きなれていない、古風な言葉が使われること。これが聞き取りの難しさにつながる。
② 式辞挨拶では、通常、原稿が読み上げられるため、さらに通訳が困難になること。
③ source language（たとえば日本語）から target language（たとえば英語）に変換する際、通訳者は、大学生が使い慣れていない格調の高い言い回しを使わなければならないこと。つまり日本語でフォーマルな言い回しをしたならば、英語でもそれに相当するフォーマルな言い回しをしなければならない。
④ 式辞挨拶はメッセージ性が弱い。抽象的な表現が多く、伝える内容があまりない、一種のformalityである。さらに日本では、改まった場では難解な日本語を使い、わかりにくく表現した方が、より正式なものに聞こえるという伝統がある。(この現象は、西洋諸国でも見受けられるが、日本ではその程度がより強いと考えられる)。そこで複雑な飾り言葉をいかに訳すかが大きな問題となるが、訓練を受けていなければ、適切な言葉に変換することは難しい。

2．留学生はどのような日本語に苦労するのか

私が担当する「通訳」の授業の正式な授業題目は「通訳者になるための実践コース Practical Interpretation」である。日本語・英語ともに上級レベルに達しているものだけが受講している。この授業のはじめに「式辞挨拶集」を活用しているが、今までの経験から、30－40分程度

の時間をあてることにしている。この時間は、日本人の受講生を想定した場合よりも長い。というのも、留学生にとっては、日本語の改まった書き言葉が、意外に「盲点」になっていることがわかったからだ。「挨拶集」は英日の対訳となっているが、小倉（2005）で考察したように、留学生には英→日よりも日→英の通訳が重要と考えられることから、「挨拶集」に関してのみ、日→英の通訳訓練しか行わないことにした。これは、1回90分の授業×15回で1学期を完結しなければならないという時間的な制約も関係している。「挨拶集」は主にモナシュ大学発行の、*Handbook of Formal Speech* から抜粋したものを使用した。

ここで授業における使用法を説明しよう。まず留学生に「挨拶集」の日本語を読ませる。その際、日本の社会人なら決して間違えることのない語句を彼らは読めないことが多い。読み方をチェックしたあとは、日本語の意味を、単語レベル、文レベルで検討する。次に対訳（英訳）を読ませ、訳し方の実例をチェックする。こうして疑問点を解消してから、5－10分ほどの暗唱時間を与える。時間が来たら「挨拶集」を伏せるよう指示し、教師が「挨拶集」をランダムに読み上げ、生徒を指名して日→英の逐次通訳をさせる、という形式である。

「通訳」の授業の場合、日本語よりも英語の能力が優れている生徒が多いため、日本語の意味さえわかれば英訳は比較的スムーズにできることが多い。したがって、ここでは、「挨拶集」の中で留学生が苦労した、日本語の語（句）・言い回しに注目したいと思う。以下のように実例に即し8つのパターンに整理・分類してみた。[5] なお品詞の分類に関しては、英訳を念頭に置き、英文法を基準にしている。

(教室で読ませた際に、学生が誤った読みをしたものは誤読、読み方がわからないものは難読、意味が理解しにくかったものに関しては理解困難としてある。難読の語句は、文字を参照せず、音声だけを聞いた場合、理解不能になる場合が多い)。

①人称に関するもの

（a）みなさまを歓迎できますことは、私にとりまして非常なよろこびでございます。誤読

式辞挨拶では、通常、「私」は「ワタクシ」と読まなければならない。だが、過去の受講生のほとんどすべてが「ワタシ」と読んだ。「ワタシ」は日常会話で使うが、通訳の現場では、よりformalな表現である「ワタクシ」を使うよう、生徒に注意を喚起しなければならない。

（b）我が市（わ）誤読

「ワガ」を、「ワレガ」と読む留学生が時々いる。

（c）ご一行（いっこう）難読＋理解困難

（d）ご来賓（らいひん）難読＋理解困難

（e）ご参会の皆様（さんかい）難読

（f）関係者（かんけいしゃ）理解困難

英語のpeople involved（concerned） という表現は知っているのに、なぜか日本語の「関係者」はピンとこないようだ。

（g）貴国（きこく）、貴社（きしゃ）、御社（おんしゃ）、弊社（へいしゃ）難読

特に「おんしゃ」「へいしゃ」は難読語。

②時に関する語句

（a）今宵ここにお集まりのみなさまを、心から歓迎いたします。難読
「コヨイ」であるが、日本人の大学生でも読めないものがいるようだ。普通の表現は「今夜」。
（b）明日（あす）誤読　＊「アシタ」と読む生徒が多い。
（c）今日（こんにち）難読
（d）昨今（さっこん）難読＋理解困難
（e）今般（こんぱん）難読＋理解困難
（f）再度（さいど）難読　＊「再び」が普通の表現。
（g）またたく間に（ま）誤読　＊「あいだ」と読む生徒がいる。

③名詞（句）
（a）みなさまのご健勝をお祈りします。（けんしょう）難読　理解困難
音声で「ゴケンショウヲ、オイノリシマス」と聞いて、即座に意味を理解できる留学生は稀である。普通の表現は「健康」。
（b）ご教示（きょうじ）難読＋理解困難
（c）ご尽力（じんりょく）難読
（d）ご安泰（あんたい）難読
（e）ご多幸（たこう）難読
（f）親睦（しんぼく）難読＋理解困難
（g）晩餐会（ばんさんかい）難読
（h）このような懇談の機会（こんだん）難読
（i）満喫（まんきつ）難読
（j）古希（こき）難読＋理解困難
70歳は「コキ」ということを日本人の大学生は知っているだろうか？授業では、この表現が杜甫の「人生七十古来稀」に由来していることも説明している。
（k）貴重な契機となる（けいき）難読＋理解困難
（l）秋の結婚シーズンもたけなわとなっておりますが理解困難
（m）愛知県下緑化センター（けんか・りょっか）難読
正しく読めた学生は、過去に存在しない。
（n）デイビス・マカッキー総督（そうとく）難読＋理解困難
governorは日本語では、「知事」と訳されたり「総督」と訳されたりする。「総督」と呼ぶ場合は、植民地で王権を代行する責任者を指す。オーストラリアは歴史的にイギリスの植民地であり、いまも元首はイギリスのエリザベス2世（ElizabethⅡ）である。そのため、オーストラリアでgovernorと出て来たら「総督」と訳さなければならない、と説明する。

④動詞（句）に関するもの
（a）培う（つちか）難読
（b）担う（にな）難読
（c）立地しております（りっち）難読＋理解困難
（d）経営改善に資する（し）難読＋理解困難

（e）式典を挙行する（きょこう）難読+理解困難　＊普通の表現は「行う」。
（f）本席を設ける（ほんせき・もう）難読+理解困難　＊普通の表現は「会を準備する」。
（g）感謝の念にたえません。（かんしゃ・ねん）理解困難　＊「感謝する」が普通の表現
（h）念じております（ねん）理解困難
（i）最後に両国のさらなる発展を祈念し（きねん）難読
（j）友好親善の一助となりますことを（いちじょ）難読　＊「助けとなる」が普通の表現。

⑤修飾語句に関するもの（形容詞的）
（a）有為な青年（ゆうい）難読+理解困難
（b）身に余る歓迎のお言葉（み・あま）理解困難
（c）人的・文化的な交流（じんてき）難読

⑥修飾語句（副詞的）
（a）盛大に（せいだい）理解困難
（b）滞りなく（とどこお）難読+理解困難
（c）奇しくも（く）難読+理解困難
（d）衷心より（ちゅうしん）難読+理解困難
（e）篤くお礼申し上げます。（あつ）難読+理解困難
（f）宜しくご指導くださるようお願いいたします。（よろ）難読
（g）本日は何卒よろしくお願いします。（なにとぞ）難読
（h）いま一度いくえにもお礼を申し述べ（いちど）理解困難　＊普通の表現は「もう一度」。
（i）両国間の計量機器業界ひいては産業界の発展に役立たせたいと理解困難
（j）今回の訪問が、興味深い有益で、かつ楽しいものであることを希望します。理解困難
（k）政治、経済はおろか,文化交流の面でも貴国との結びつきはますます深くなっております。理解困難
この表現に慣れていないと、音声だけを聞いて「愚か」と混同する恐れあり。

⑦尊敬・謙譲表現
（a）お忙しい中、ご出席いただきましたことを感謝申し上げます。
本来なら、出席者に対してお礼を述べているのだから、尊敬語を使い「ご出席くださいました」となるべきだが、最近では「ご出席いただきました」と謙譲表現にすることが多い。また「感謝申しあげます」は「感謝します」の謙譲表現だが、日常会話ではまず使われることはない。これらのことは、留学生に注意を促さなければならない。
（b）このレセプションにご出席をたまわりまして、ありがとうございます。理解困難
「ご出席いただきまして」は、さらに改まった場では、「ご出席たまわりまして」となる。「たまわる」という表現を知っている留学生はほとんどいない。あるいは知識としては知っていても、実際にこの表現を見聞きしたことがないために、挨拶集に出てきて戸惑った学生が多い。
（c）この簡単な説明で、我が市がどんなところか、その感じをつかんでいただけたかと思います。理解困難

英訳の際は、I hope～で処理すればよいのだが、「いただけたか」という形が、一見して疑問文であるため、意味をとれない学生がいた。

⑧その他、意味がとりにくいもの

（a）継続的に促進させる 理解困難

「促進しつづける」といえば留学生も理解できるのだが...。

（b）まさに肌を接して交流を繰り広げる 理解困難

英訳では 'through close contact' と訳しているが、日本語の「親密感」を出せたかどうか疑問である。うまく訳せない場合は、思い切って割愛する手もある。

（c）両国の青年は、相互理解のもとで交流を続け、ともに成長することで将来のために多大な恩恵を得ることになります。 理解困難

日本語で読むとわかったような気になるが、英語に訳すとなると難しい。授業では、たとえば「両国の青年がこれからも交流を続け、相互理解を促進するよう願っています。両国の若者がともに成長することで（将来の）両国にとってプラスになるはずです」とまず日本語でパラフレーズしてから、英訳させるようにしている。

3．プロ通訳者による英→日通訳の改変例から学ぶ

本章では、挨拶集のオリジナルの日本語とその英訳例を対照して検討する。その際、日→英の直訳に近いものを俎上に上げてもあまり意味が無い。明らかに原文を改変させたものを取り上げ、なぜそのような操作を行ったのかを考察したい。原文の変容に、異文化コミュニケーション研究としての意味を見出せると考えるからである。実際、授業中、受講生にこの種の指摘を行っているが、原文改変の理由に強い関心を示す学生が多い。改変の理由を*Handbook of Formal Speech*は、次のように述べている。

> （本書の）もうひとつの目的は、格式ばったスピーチの通訳が自然であるためには、言われた通りをそのまま訳していたのではいけないことを示すことにある。それぞれの言語が有する特徴のため、単なる直訳は不自然、不適切になることが多い。(p.5)

同書は、「通訳者たちが実際に通訳をした原稿を利用した」ので、通訳者の現場での訳出の工夫を知る上でも貴重である。本章では、「プロの知恵」を3つのパターンに分けて見ていくことにする。

①訳出の省略

（a）ただ今ご紹介に預かりました［N］でございます。

Thank you for your kind introduction.

日本では、司会者がまずスピーカーを紹介し、それからスピーカーが自分の名前を繰り返すのが慣例だ。例えば、「... 佐藤氏は、○○大学をご卒業のあと、○○に勤務されました。... それでは、佐藤氏どうぞ」「ただいまご紹介にあずかりました、佐藤でございます」という具合であ

る。しかし、英米ではスピーカーが改めて自分の名前を繰り返す慣習はない。そこで英訳例では名前を訳出しなかった。*Handbook for Formal Speech* には "The interpreter should ignore any repetition of his name." (p.2) とある。[6)]

(b) お疲れにもかかわらず、この会のために貴重な時間をさいてご出席くださいまして、まことにありがとうございます。
Thank you very much indeed for giving up your valuable time to attend this meeting.

「お疲れにもかかわらず」は日本語特有の表現。日本人は、よく「お疲れさま」というが、これは英語に訳しようがない。こういうエピソードを聞いたことがある。海外から有名なピアニストが来日した。演奏後に通訳者が「お疲れさま」のつもりで、"You must be tired." と声をかけたら、相手はひどく気分を害したという。もちろん、演奏のあとに、演奏者にこの言葉をかけたら「疲れていて、あなたは今日はいい演奏はできませんでしたね」という意味になってしまう。「お疲れさま」は英訳の際、注意したい語句のひとつである。さて、上の例で「お疲れにもかかわらず」を 'despite your fatigue' などと直訳すると、やはり同じ理由で好ましくない。そのため通訳者は、この部分を省略したのである。[7)]

②聴衆に親近感をもたせる工夫

英語の口語では、「相手を含めて一般に人々を指すときに、youを使う」ことはよく知られている。例えば、「アメリカでは、都市部から離れたところにマイホームを建てる」という日本語を英訳する場合、口語では "In the United States, people build their houses far from the city." ではなく、"In the United States, you build your house far from the city." とすることが多い。youを主語に立てたほうが、「親近感」や「当事者性」が伝わりやすい、というのが私の実感だ。

(a) 先生方には、ご自身の目で、ありのままの日本、ありのままの日本人の姿を見ていただきました。ご帰国後、先生方には、日本で見聞きされたこと、日本人の人々と直接接触して感じられたことを、生徒たちにいろいろお話いただけることと存じます。
I hope that the teachers——you, the teachers——were able to see Japan and the Japanese people as they really are. And I'm sure that after returning to your countries, you will tell your students what you saw, heard and felt in Japan as you came into direct contact with the Japanese people.

'the teachers' と主語をはじめたのなら、あとはtheyで受けなければならない。ところが、目の前に話しかけるべき聴衆がいるのに、theyでは「親近感」が伝わらない。そこで通訳者は、'you, the teachers' といい直し、あとの主語をすべてyouにしている。さりげなく「親近感」をつくりだす巧みな技術である。

次に、褒め言葉を強調する訳出例を挙げる。

日本語は、謙譲表現が発達しているせいか、相手に対する褒め言葉が豊かではない、という

印象を私は受ける。英語で相手を褒める時は、日本人からするとやや大げさに表現するくらいでないと、相手に伝わりにくいことがある。ましてや、親睦の場では相手を褒め上げるくらいでちょうどいい。ただし原発言の情報を変えるわけにはいかないから、通訳者の微妙なテクニックが必要となる。

(b) さらに、何よりもオレゴニアンと言われます温かい人情や、豊かな生活環境に恵まれた大変すばらしい州であります。こうした点を含めまして富山県とオレゴン州には多くの共通点があり、本県にとりまして最高のパートナーであると思っております。
But perhaps, Oregon's biggest assets are its citizens——the generous, warm-hearted Oregonians——and the very comfortable living environment. Toyama shares many of these qualities, and in that respect, we feel very strongly that Oregon is our best and ideal partner.

下線部の日本語が、それぞれ英訳ではいっそう強調された表現になっているのに気づくだろう。しかも伝えられるべき情報は的確に表現されており、情報量に過不足は無い。見事な通訳例だと思う。

③語句の付加、論理の再編

筆者が通訳学校で勉強していた頃、講師をしていたトップ通訳者から「1分間でしゃべったものは、1分間で訳し、情報を過不足無く表現する。これがプロ通訳者だ」といわれたことがある。「プロ通訳は、ことばの言い直しをしてはいけない」と注意されたことも覚えている。その他、印象深く覚えている言葉に、「通訳者は、話の内容を整理してあげることも必要」というのがあった。なぜ、source languageからtarget languageへ言葉を置き換えるだけではいけないのだろうか。

日本語は、言葉よりも状況に依存するhigh-context languageの典型であり、英語は逆に典型的なlow-context languageであるといわれる。したがって、日本語はあまり言葉を尽くさなくても意図を伝えやすいのに対して、英語ではより多くの言葉を使わなければ意図を伝えにくいと考えていいだろう。私なりのことばでいえば、英語は「building blockの論理」であるのに対し、日本語は、「点線の論理」である(「点線」といったのは、点と点の間にある情報をとばすことと構成が弱いという意味合い)。英語は、レンガを積み上げるように隙間なく論理をつなげ、堅固な論理構成を好む。一方、日本語はしばしば途中の論理を省略し、曖昧な論理構成をとることが多い。これが通訳をして感じた、筆者の両言語に対する印象である。

一つ例を出そう。これは日本人大学生の話だ。夏に授業をしていると、学生から「先生、暑いです」といわれることがある。もちろん「クーラー(エアコン)を強くしてください」という意味である。だが留学生にこの例を説明し、意味を訊くと、たいていはポカンとして「先生、暑いです」の意図がわからないことが多い。「エアコンを強くする」という意味だとわかるのはよほど勘のいい生徒だ。日本人なら、「先生、暑いですからクーラーを強くしてください」と傍線部が省略されていることは、即座にわかるだろう。これは、日本語の「点線の論理」を示すいい実例ではないだろうか。

以上のことから、日→英の通訳は、言葉の機械的な置き換えに終始するだけではすまないことが想像できる。時には両言語の特性に配慮し、欠けたbuilding blockを継ぎ足したり、乱れた論理を再編したりしなければならないのだ。

(a) 今般、諸外国の中国・高校教員をお招きするプログラムによりまして、韓国・フィリピン・タイから、それぞれ20名の先生方をお迎えできましたことを、大変うれしく思っております。

I have the pleasure of welcoming sixty teachers——twenty each——from South Korea, the Philippines and Thailand, who are visiting Japan under the program set up by the Japan Foundation.

英語では、「総勢60名、つまりそれぞれの国から20名ずつ」といった方がわかりやすい。日本語の原発言に欠けている、「総勢60名」という部分を補って英訳している。これは数字を補った例である。

次は1文を補って、論理構成を明確にしている例。

(b) ご一行は、去る5月13日に来日され、18日間の滞在を終えられ、明後日、日本を発たれることになっております。この間、先生方は、まず東京におきまして文部省、上智大学、ICU高校などを訪問されたあと、韓国チームは岩手県、フィリピン・チームは石川県、タイ・チームは新潟県におきまして....。

The group arrived in Japan on the 13th of May, and they are due to depart Japan the day after tomorrow, completing their 18-day stay. They started their stay in Tokyo, with visits to the Ministry of Education, Sophia University and ICU Senior High. Then the group split into three teams and made separate tours of Japan. The Korean team went to Iwate Prefecture, the Philippine team to Ishikawa Prefecture and the Thai team to Niigata Prefecture, where....

下線部は、「一行が3チームに分かれ、日本を別々に視察した」と伝えているが、原発言には無い。だがこの欠けたbuilding blockを補ったために、英語の通訳は格段にわかりやすくなったといえる。

次は、一文を加えるだけでなく、訳出の順番も替えて構成を改めた例。

(c) 秋の結婚シーズンもたけなわとなっておりますが、本日ロバーツ知事をはじめ、オレゴン州のみなさまをお迎えし、富山県とオレゴン州の結婚式とも言うべき友好提携締結調印式を滞りなく終えることができました。ここに、オレゴン州のみなさまをはじめ、ご来賓のみなさま、そして県内各界の代表のみなさま方に心からお礼申し上げる次第であります。

Autumn is the wedding season in Japan. A very special wedding took place here in Toyama today——a wedding between Toyama and Oregon State. The ceremony was conducted auspiciously in the presence of guests from Oregon, includ-

ing Governor Roberts. I'd like to thank you all deeply for making it possible to establish the sister-state relationship.

この例の訳出は簡単そうで意外と難しい。「日本では秋の結婚シーズン」→「富山とオレゴン州の結婚式」という話の流れが、日本語ではしっくり来るのに、いざ英語に訳してみると、唐突過ぎて、building blockが一つ足りないように思えるのだ。英訳では、"A very special wedding took place here in Toyama." という一文を補い、話の流れをスムーズにしている。「日本では秋の結婚シーズン」→「ここで特別な結婚式が行われた」→「それは富山とオレゴン州の結婚式だ」となって話の論理が理解しやすくなった。また「友好提携締結調印式」の訳語(to establish the sister-state relationship) を文尾におくことにより、無理のない英語となった。英訳の再編にうまく成功している例である。

(d) わたくしは、このたびのご旅行で芽生えた、国際的な相互理解のつぼみが、先生方のお国、あるいは日本のいろいろな場所で、美しい花を咲かせることを祈っております。
The seeds of international mutual understandings that you've planted during your stay will, I hope, bloom into beautiful flowers here in Japan and in your countries as well.

なぜ「つぼみが芽生える」を「種を蒔く」と替えたのか？ひとつには日米の慣用表現の問題がある。日本語は「自然に～なる」「自然に発生する」という言い方が多いため、「つぼみが(自然に) 芽生える」という表現は自然である。一方、英語では、主語をつけ、積極的な表現にすることが多い。また論理的に考えれば、つぼみが芽生えるためには、まず種を蒔かなければならない。このような理由から英訳では動作主を明らかにし「あなたが種を蒔く」(you plant seeds) としたのだろう。おかげで、より論理的でわかりやすい訳文になった。この英訳は、授業中、英語母語話者も含め、通訳者の技量を高く評価した部分である。

終わりに

通訳業務を車の運転にたとえれば「式辞挨拶集」の暗唱は「シートベルト」にあたるかもしれない。「シートベルト」をしていても車の運転ができるとは限らない。自動車を運転するためには、教習所に通って、実技や学科を勉強しなければならない。免許を取得後、経験を積むことも運転技術の向上に重要であろう。しかし「シートベルト」を締めていたお陰で、致命的な怪我を負わないで済む、命拾いすることは必ずやあるにちがいない。「式辞挨拶」の通訳を、もしも「ぶっつけ」でやらされた場合、駆け出しの通訳者は致命傷を負いかねない。慣れていないものにとってはそれほど高いハードルなのである。しかし定型のパターンを暗唱しておけば、安全運転が可能になるだろう。

さらに、「式辞挨拶集」の中の語句や言い回しは、留学生の「盲点」が一杯詰まっているから、その暗唱は一層効果的となるはずである。実際、過去の受講生で、学期の授業の終了時に、「この挨拶集の暗唱は、将来絶対に役立つと思う」といってくれた生徒が何人かいる。裏返していえば、こんな言い回しが通訳現場でいきなり出てきたらたまったものではない、ということな

のかもしれない。

このわずかな文例集の暗唱は、将来、留学生にとって「シートベルト」以上の役割を果たしてくれる可能性は非常に高い。そう筆者は確信している。

参考文献

Goodman, M& Greenwood, R & Hirata, K&Mayer, M & Pinda, M & Pinkerton, Y（1996）*Handbook of Formal Speech for Interpreters* 通訳者のための式辞挨拶ハンドブックRevised Edition, Japanese Study Centre Monash University, Melbourne

篠田顕子・新崎隆子（1995）『ボランティア英語のすすめ』はまの出版

ピンカートンヨウコ・篠田顕子（2005）『実践英語スピーチ通訳』大修館書店

小倉慶郎（1995）「日英翻訳では何が問題となるのか―留学生センターの授業から―」『授業研究3』

注

1）『実践英語スピーチ通訳』（pp.3-4）では、通訳を11種類に分類している。すなわち、会議通訳、官・民組織交流の通訳、一般通訳、商談・ビジネス通訳、コミュニティー通訳、随行通訳、通訳コンパニオン、ガイド通訳、放送通訳、警察・法廷通訳、電話通訳である。

2）『ボランティア英語のすすめ』pp.18-19

3）同書p.20

4）日本企業に就職して得られるものとは、いったい何だろうか。「企業文化」の習得が、通訳者あるいは通訳志望者にとっての一番大きな収穫である、と筆者は考えている。「企業文化」とは、社員の上下関係、社内での振る舞い方、ビジネス慣行（取引、文書の作成の仕方etc.）など多岐に渡る。ここでは、世界的にも有名な、日本の某電器メーカーで働いたことのある現役通訳者（女性）の話を紹介したい。まさに日本の「企業文化」の一端を語ると思えるエピソードだからだ。

彼女は帰国子女であり、日本の大学を卒業後、企業内の秘書をしていた。就職して間もない頃、役員会があり、長い会議が終ったあと部屋から退出していく幹部たちにどのような挨拶をしたらよいか迷ったという。「ご苦労さま」だろうか「お疲れさま」だろうか。「ご苦労さま」は目下の人に発するニュアンスがあるから、この場合は「お疲れさまです」がいいだろう。「お疲れさまです」といいながら深々と頭を下げればいいのではないか。そう思いながらも、念のため彼女は、上司に訊いてみた。答えはこうだった。「何もいわずに黙って、頭を下げなさい」。このエピソードを、筆者の通訳の授業でも留学生に話したことがある。話の途中、生徒たちにも、秘書の立場ならどう対処したらいいのかを考えさせた。しかし、言葉でコミュニケーションするのは当然だと考えている留学生たちには「何もいわない」という対応は思いもよらなかったようだ。「日本企業の秘書は、このような場合、言葉を発せずにただ頭を下げるのが適切なようだ」。この答えを聞いたときの、彼ら（彼女たち）の驚きの表情は忘れられない。

5）この部分の分類・記述は、『実践英語スピーチ通訳』（pp.187-191）を参考にした。

6）実はこの問題は一筋縄ではいかない。同書で、スピーカーが繰り返した名前を、そのまま通訳している例文もある（団長の佐藤進でございます。I am Susumu Sato, the group leader.）。日本人通訳者の場合、スピーチ冒頭で告げられた名前をそのまま機械的に訳してしまう人が多数派だろう。スピーカーから「自分の名前を訳さなかったではないか」とあとでクレームをつけられる危険性があるからだ。

7）ただし、"Thank you very much for attending this meeting <u>despite your tight schedule</u>" と言葉を替えれ

ば、「お疲れにもかからず」という日本語のニュアンスを出すことはできるだろう。日本人の通訳者で、このように訳す人は多数いると思う。しかし*Handbook of Formal Speech* では、感謝の表現と 'despite your tight (or busy) schedule' を併用するのは好ましくないと考えているようだ。意味は通じても英語として自然な表現ではないからだ。同書では、「お忙しい中」「ご多忙中」という日本語は直訳せずに、'giving up your valuable time' 'sparing us your precious time' 'making time' などを使って訳出するように勧めている。

（おぐら　よしろう　大阪府立大学助教授、本センター非常勤講師）

＜資料１＞

筆者は、2005年11月26日、学習院大学英文学会翻訳ワークショップのパネリストとして、「通訳者と翻訳者（の資質）の一般的な違い」について発表した。以下は当日配布したハンドアウトの一部である。

通訳者

① 英語、日本語ともに高いレベルの「聞き話す能力」が必要。（通訳の準備段階では英語、日本語ともに、高い「読解力」も不可欠）
② 短時間で処理を行わなければならない。アクロバティックな能力、迅速な情報処理能力が必要。
③ 原則として、一度訳した言葉は訂正できない。
④ 完全を求めすぎない。音声はその場で消えるので、過ぎたことをあとに引きずらない性格がプラスになる。
⑤ 一時的に大きなプレッシャーがかかる。精神的、物理的にプレッシャーに強い性格。（同時通訳者の通訳中の血圧は、200を越えるという）
⑥ 外交的な性格がプラスになることが多い。人と会うのが好き。対人関係の処理をうまくこなせる、明るい性格が有利。
⑦ 特に、ビジネス通訳をする場合は「社会常識」は重要。ビジネス・マナー、服装、企業内での振舞い方を身につける。

翻訳者

① 英→日翻訳の場合は、英語の高い「読解力」＋日本語の「文章力」が必要。特に日本語として優れた文章を書けることが必須条件。
② 通訳と比べて、翻訳の方が作業に時間をかけることができる。根気よく調べて、よい訳文を残せる能力。
③ 原稿作成段階で何度も書き直しをする。さらに校正の段階や増刷の際に、訳文の訂正ができる。
④ 完全に近づこうとする。翻訳は文字としていつまでも残るので、少しでもよい訳文を目指す姿勢が大切。
⑤ 物理的なプレッシャーよりも、締め切りに対する精神的プレッシャーが大半。
⑥ 対人関係が苦手でも、内向的な性格でも問題ではない。ものごとにじっくり取り組める性格が必要。

⑦ 「社会常識」は重要ではない。

＜資料２＞

以下は、*Handbook of Formal Speech for Interpreters*から、筆者が授業で使用している挨拶文の一部（日本語のみ）を抜粋したものである。挨拶文の選定・分類にあたっては、『ボランティア英語のすすめ』を参考にした。

①歓迎の言葉

1 みなさまの松本ご訪問を温かく歓迎いたします。
2 みなさまを歓迎できますことは、私にとりまして非常な喜びでございます。
3 みなさまをお迎えできる機会に恵まれましたことは、私どもにとりまして、大変名誉なことでございます。
4 私どもは、自分たちの町がみなさまのホスト役を務めることができますことを、大変名誉に思っております。
5 松本市に皆様をお迎えできますことをうれしく思います。

②パーティーでの歓迎の言葉

1 晩餐会の主催者を代表して、みなさまを歓迎いたします。
2 まことにささやかな晩餐会にご出席いただき、うれしく思っております、
3 この交流・交換晩餐会に、みなさまをお迎えすることができ、大変うれしく思います。
4 今宵ここにお集まりのみなさまを、心から歓迎いたします。
5 まことにささやかな晩餐会ではありますが、みなさまのご協力に感謝の意を表する意味で、本席を設けた次第です。
6 ここにみなさまをお迎えし、夕食会を開催できますことをうれしく思います。
7 限られた時間ではありますが、お互いの親睦を深め、有意義なひとときを過ごしていただきたいと思います。
8 N委員会を代表しまして、今宵の夕食会へみなさまを心から歓迎いたします。
9 今宵ここにお集まりのみなさまに心から歓迎の意を表します。
10 今宵ここにみなさまを歓迎できますことをうれしく思います。
11 みなさまの厚いお持てなしに対し、それをお返しする機会を得ましたことを、うれしく思います。
12 このレセプションにご出席をたまわりまして、ありがとうございます。
13 お忙しい中、ご出席いただきましたことを感謝申し上げます。
14 ～のみなさまには、お疲れにもかかわらず、この会のために貴重な時間をさいてご出席くださいまして、まことにありがとうございます。
15 この催しに参加するために時間をさいていただきまして、感謝しております。

③相手（国）についてほめる

1 貴国は、手厚い福祉の国として世界に知られております。

2　貴国を訪問したとき、その雄大な自然に大きな感動を受けました。
3　貴市の美術館や美しい庭園などの文化施設は有名です。
4　貴市は無限の可能性を秘めた美しい自然にあふれ、そして何よりも心豊かな国民が住む、大変魅力あふれる国であります。

④自分（の国）について
1　長野市は、中部日本の文化とスポーツの中心地ということに、大変誇りを持っております。
2　私どもは、貴国との貿易を大変重要視いたしております。
3　福岡は、九州の製造業の中核地域であります。
4　スポーツ大会の場所として、我々が持つ長所を、直接経験していただければと幸いです。
5　この簡単な説明で、我が市がどんなところか、その感じをつかんでいただけたかと思います。

⑤訪問に寄せる期待の言葉
1　今回の訪問が、興味深く有益で、かつ楽しいものであることを希望します。
2　きっとみなさまは楽しく、かつ有意義な一日を過ごされることと思います。
3　この訪問で得られた関係は、将来の文化交流を広めるのに必ず役立つことでありましょう。

⑥２国間関係について
1　貴国とわが国との交流は昨今、目を見張るものがあり、政治、経済はおろか、文化交流の面でも貴国との結びつきはますます深くなっております。
2　日本と貴国とは友好関係にあり、広く経済分野をはじめ、社会のあらゆる面において深いつながりを持っています。
3　産業、経済、文化、教育等、さまざまな分野で活発な交流が繰り広げられています。
4　日本と貴国との経済関係は大きく拡大しており、貿易量も大きくふくらんできております。
5　２国間の交流は、各分野にわたり年々活発化しており、大変よろこばしいことであります。
6　我々は、両国の関係がさらに強くなるように取り組んでおります。
7　両国間の相互貿易および投資の歴史はかなり長く、大変重要な意義を持っています。
8　両国間の貿易、投資を継続的に促進させることが非常に重要です。
9　貿易、観光産業、国際関係において、いかに貴国が日本にとって重要であるかをいくら強調しても、強調しすぎることはありません。
10　今後なお一層の協力を促進していくとともに、両国間の産業の発展に役立たせたいと念じております。

⑦姉妹都市間の交流について
1　市長をはじめ代表団のみなさまを、ここ数日間おもてなしすることができ、光栄に思います。
2　知事に就任しましてからも、両国間の、特に愛知県とビクトリア州の関係が進展するのを見、大変喜ばしいと思います。

3　本日バンクスタウンと吹田市の姉妹関係締結を完了いたします。
4　姉妹州関係がますます進展するのを期待しております。
5　ビクトリア州と愛知県は過去10年間、豊富で多彩な文化交流をおこなってまいりました。3年前にはオーストラリア建国200年を記念して、私どもから歌舞伎団を派遣いたしました。また今年は、ビクトリア州からの贈り物、オーストラリア庭園が愛知県下緑化センターに造園され、去る5月、その開園式がデイビス・マカッキー総督をお迎えして盛大に挙行されました。
6　今回の訪問は極めて短いものでありますが、両氏の友好親善の促進に大きな役割を果たすものと確信しております。
7　この訪問を契機に、ますます貴市と富山県との青年の交流がさかんになるよう望んでおります。
8　メルボルンと富山の友好関係がこれからも進展し、栄えることを望んでおります。

⑧若者交流の場での言葉
1　本日、ここに未来を担う若者1500人が集い、文化、芸術、スポーツ等、あらゆる分野にまさに肌を接して交流を繰り広げることは、両国の文化交流の歴史に新しい一歩を築く、まことに意義深い試みであります。
2　いつの時代においても、明日の世界を担うのは、高い理想とあふれる情熱を持った青年たちであります。
3　この訪問を契機にますます貴国と日本の青年の交流が活発になり、友好親善が深まってまいるよう望んでおります。さらにこれが、世界の恒久平和に大きく貢献するものと信じております。
4　この貴重な経験は、青年たちにとって生涯忘れることのできないすばらしい思い出となって、一人ひとりの心に生き続けるものと確信しております。
5　この交流プログラムが始まって、もう5年になりますが、毎年温かい歓迎と対照的な文化の体験を通して、ますます進展しております。
6　みなさんの滞在が、この国の様々な思い出や印象となって残り、生涯私たちのことをよき思い出として覚えていただきたいと思います。
7　真の教育は、私たち自身の世界的理解を必要としますが、それは私たちの行っているような国際交流によって促進されます。
8　両国の青年は、相互理解のもとで交流を続け、ともに成長することで将来のために多大な恩恵を得ることになります。

⑨お別れの挨拶
1　楽しく歓談してまいりましたが、お別れのときが近づきました。
2　またたく間に時間が経ち、残念ながらもうみなさま方とお別れする時間になりました。
3　お別れを言うときがきました。
4　みなさまとお会いでき、友好を温める機会を得たことを喜ばしく思っています。またいつの日か、日本もしくはオーストラリアにてみなさまと再会できることを信じております。

5　みなさんの温かい友情を忘れずに、来年4月にまたみなさんをお迎えできるのを心待ちにしています。

6　将来、みなさまを再度ここにお迎えできることを心から希望いたします。

7　お国に楽しい思い出をお持ち帰りいただきたいと思います。みなさまのご健勝をお祈りします。

8　お国への安全な旅を祈念いたします。

9　関係者の方々に心から感謝申し上げます。

10　最後に両国のさらなる発展を祈念し、いま一度いくえにもお礼を申し述べ、お別れの挨拶といたします。